

メッセージアウトライン 創世記25:19～34「ヤコブとエサウ」

アブラハムは平安な老年を迎え、長寿を全うして息絶えて死んだ。彼の一生は百七十五年であった。→創世記25:7-8 アブラハムの妻サラは百二十七歳で死んでマムレに面するマクペラの畑地にある洞穴に葬られている。→23章 彼の子らイサクとイシュマエルが彼を妻サラと同じ場所に葬った。→25:9-10 25:12-18節はイシュマエルの歴史が述べられている。そして、さらに聖書の記述は神が約束によって与えられた、そしてアブラハムの正統な子孫であるイサクへと続いていく。

[19]「これはアブラハムの子イサクの歴史である。アブラハムはイサクを生んだ」

「イサクの歴史」イサクの死についての歴史も含めて35章の終わりまで続く。しかし、実際はその子どもたちをも含めた歴史を通して神のみわざがダイナミックに展開されていく。

[20]「イサクがパダン・アラムのアラム人ベトエルの娘で、アラム人ラバンの妹であるリベカを妻に迎えたときは、四十歳であった」

「パダン・アラム」メソポタミアの北部。「アラム人」アラムはノアの息子セムの第五子。→創世記10:22 アラム人はシリアからメソポタミア全土にわたって住んでいたセム族の呼び名。アブラハムはアラムではなく、セムの第三子のアルパクシャデの子孫であるが(10:24,11:10-26)、それも含めてアラム人と呼ばれていたと思われる。→申命記26:5

[21]「イサクは、自分の妻のために主に祈った。彼女が不妊の女であったからである。主は彼の祈りを聞き入れ、妻リベカは身ごもった」

妻リベカはアブラハムの妻サラと同様、不妊の女であったのでイサクは子どもが与えられることを主に祈り願った。彼はこの時だけ祈ったのではなく、継続して祈り続けたことであろう。26節によれば彼が六十歳のときに子どもが与えられているので、二十年間祈り続けたのであろう。そして、ついに主は彼の祈りに答えられ、妻リベカは身ごもったのである。

[22]「子どもたちが彼女の腹の中でぶつかり合うようになった」彼女はまだ腹の中の子どもが双子であることを知らない。彼女は不安を感じ「主のみこころを求めに出て行った」アブラハム、イサクと代々築いてきた礼拝のための祭壇があったのであろう。そこで彼女は先の先どうなるのか主のみこころを祈り求めた。

[23]「すると主は彼女に言われた。『二つの国があなたの胎内にあり、二つの国民があなたから分かれ出る。一つの国民は、もう一つの国民より強く、兄が弟に仕える。』」

主はここで、弟の方が強くなり、兄が弟に仕えるようになることを示された。つまり、弟の方がアブラハム、イサクと続いた神の契約の民となるということである。これは本人の行いのゆえでもなく、その素質、能力のゆえでもない。ただ、神の選び、神の定めによるということである。私たちは普通、長男が家を継ぐものと思うし、当時の世界で

もそうであったが、イサクの子どもたちに対する神の定めは人間の思いとは異なっていたのである。

[24]「月日が満ちて出産の時になった。すると見よ。双子が胎内にいた」

これは主のことばのとおりである。

[25]「最初に出てきた子は、赤くて、全身毛衣のようであった。それで、彼らはその子をエサウと名づけた」 原語では「赤い」はアードーム、「毛衣のよう(毛深い)」はセーアールであり、この二つを混合してエサウと名づけたのではないかと思われる。

[26]「その後で弟が出て来たが、その手はエサウのかかをつかんでいた。それで、その子はヤコブと名づけられた。イサクは、彼らを生んだとき、六十歳であった」

「かかと」アーケーブ 兄のかかをつかんで生まれて来るというのは普通のことでない。まるでこの子の将来を暗示するような出来事である。

[27] この二人は成長し、兄のエサウは巧みな狩人、野の人となった。狩人は自分の腕一本で野生の動物を捕らえて生活するので、獲物が取れたり取れなかつたりすることもあり、原始的で生活に安定を欠くものであった。彼は日々野山を駆け巡って獲物を追う行動的で野性的な人となった。

「ヤコブは穏やかな人で、天幕に住んでいた」この「穏やかな」とは静かであると同時に社会的な秩序を受け入れるゆえの平安な生き方を意味していると思われる。エサウとは対照的である。

「天幕に住んでいた」とは現代の引きこもりとか、お宅人間であったというのではなく、天幕に住みながらする仕事、つまり羊飼いととしての生活を意味している。それでヤコブも野に出て羊を追って仕事をしているわけであるが、やはり、狩人としての生き方とは全く違ったものであったであろう。

[28]「イサクはエサウを愛していた。猟の獲物を好んでいたからである。しかし、リベカはヤコブを愛していた」

ここで両親の偏愛という問題が出てくる。父親のイサクは息子のエサウが猟に行って仕留めてきた獲物を好んだので、エサウを愛したという単純な理由。母親のリベカは野性的で粗野なエサウよりも、どこか自分にも似ているところがある穏やかなヤコブの方を愛したのである。もちろんそれだけではなく、出産の時に主が告げられた「兄が弟に仕える」とのことばもリベカは覚えており、それもヤコブのほうに傾斜した理由であろう。しかしながら、この両親の偏愛はやがて大きな問題をもたらすことになる。

[29-30]「さて、ヤコブが煮物を煮ていると、エサウが野から帰って来た。彼は疲れきっていた。エサウはヤコブに言った。『どうか、その赤いのを、そこの赤い物を食べさせてくれ。疲れきっているのだ。』それで、彼の名はエドムと呼ばれた」

ヤコブは天幕のそばで煮物を煮ていた。夕食の支度をしていたのであろう。「赤い物」とは34節を見ると「レンズ豆の煮物」であったことがわかる。レンズ豆とはパレスチナ地方ではよく栽培されている豆で薄いレンズ状の実がなる豆であり、シチューやスープ

にすると赤い色になる。エサウは疲れきって空腹であり、もう我慢できない状態であった。そこに料理された物が何であってもとにかく早く食べたいとの思いでヤコブに求めた。ここから彼は「エドム」と呼ばれるようになった。エドムとは「赤い」（アードーム）に由来する名で、このようなかたちで彼の粗野な性格が描写されていると考えられる。

[31]「するとヤコブは、『今すぐ私に、あなたの長子の権利を売ってください』と言った」

ヤコブは母親から、出生の時の「兄が弟に仕える」との神の約束を繰り返し聞かされていたであろう。それでチャンス到来とばかり、食事と引き換えに長子の権利を自分に売るとエサウに迫った。「長子の権利」一般には財産の継承において二倍の分け前を得ることができた。→申命記21:17

しかし、ここでは神がアブラハムと契約を結ばれたことに由来する祝福のすべてを意味すると考えられる。それは、カナンの全土が所有として与えられること(17:8)や子孫が空の星のように増え広がるということ(15:5)やその子孫によって地のすべての国々が祝福を受けるようになる(22:18)などを含むものである。これは計り知れない祝福である。

[32-33]「エサウは、『見てくれ。私は死にそうだ。長子の権利など、私にとって何になるだろう』と言った。ヤコブが『今すぐ、私に誓ってください』と言ったので、エサウはヤコブに誓った。こうして彼は、自分の長子の権利をヤコブに売った」

エサウは空腹のあまり、財産の分け前がどうなろうとかまわないと思ったのだろう。二倍の分け前など今はどうでもいい。それよりも食べ物だ。彼はこのような態度を取ったことの結果として、不注意にもそこに伴っている霊的な特権をも放棄してしまうのである。

「今すぐ、私に誓ってください」ヤコブはエサウに誓うことを迫る。今から4千年近く前の時代には契約書も印鑑もなかったであろうが、それゆえに自分の口で誓うということは大きな効力を持っていた。これは単なる口約束ではないのである。創世記15:8節以下で主がアブラハムと契約を結ばれた時、二つに切り裂かれた動物の間を通り過ぎられたが、それは、もし約束を守らなかったなら、この動物のように切り裂かれてもかまわないという厳粛な意味を持つ。エサウとヤコブの場合も切り裂かれた動物こそなかったが、その誓いは神聖で正しく効力を発揮するものであった。後になって、あれはそんなつもりではなかった。取り消すというようなことはできない。それで、ヤコブはエサウに誓わせたのである。エサウは事の重大性を軽んじて誓い、長子の権利をヤコブに売ってしまった。

[34]「ヤコブがエサウにパンとレンズ豆の煮物を与えたので、エサウは食べたり飲んだりして、立ち去った。こうしてエサウは長子の権利を侮った」

もしヤコブが本当に出生の時の神の約束を堅く信じていたならば、神の約束は人間の力の助けを借りなくても必ず実現するので、このような策略をしなくても、その時が来るのを待つだけの実現するのを待てばよかったのかもしれない。しかし、ヤコブは自分で積極的に

動き、抜け目なく取引をして長子の権利を得た。

また、もしエサウが長子の権利にともなう物質的祝福だけでなく、アブラハム以来の霊的祝福に思いを致しておれば、このような軽率な行動を取ることはなかったであろう。

ヤコブは無理やり、ずる賢く行動して神の約束を実現させたように見えるが、これは神の計画を人間がゆがめてしまったということであろうか。そうではない。誰も神の御手を押さえて自分が代わりにやってあげると言える者などいない。(ダニエル4:35) 神はそのみこころを確実に実現に至らせるお方である。それでここでは、ヤコブのずる賢さやエサウの軽率さという両者の欠陥を通して、それを越えて神のみわざが行われていったと考えることができる。→ I コリント1:25

ここから私たちは何を教えられるだろうか。兄が弟に仕えるというのが神のご計画であるならば、私たちに何ができるか。誰も神の決定されたことを変えることはできない。しかし、私たちはここで運命論者になってはいけない。すべてがルールの上に載せられているのならば、私たちが何をどれだけしても空しいと考えてはならない。神は私たちのために最善の御計画を持っておられる。兄が弟に仕えるとはエサウとヤコブの場合に言われたことで、これをすべての兄弟に適用することはできない。別の場合は弟が兄に仕えるかもしれないし、兄も弟もすばらしく栄えるかもしれない。土のちりにすぎず、罪のうちに生まれ、永遠の滅びに行くべき私たち人間を愛してくださり、そのひとり子イエス・キリストをこの地上に送り、私たちの罪の身代わりとして十字架につけてくださったほどのお方が、私たちにいたずらに嘆き、悲しみ、苦しみを来たらせるようにご計画をされているはずがない。今日のエサウとヤコブの例からもわかるように、神は私たちの愚かさや失敗をも用いて、それを働かせてご自身の御計画を実現に至らせることのできるお方なのである。→ローマ8:28